# 夢野久作全集

夢野久作全集6　一九六九年十二月三十一日　第一版第一刷発行
一九七四年六月三十日　第一版第三刷発行
編者　中島河太郎・谷川健一　©杉山龍丸　一九六九年
発行者　竹村　一　発行所　株式会社三一書房　東京都千代田区神田駿河台二の九
郵便番号一〇一　電話東京（二九一）三一三一～五番　振替東京八四一六〇番
印刷所　暁印刷株式会社　製本所　鈴木製本株式会社

# 目次

巡査辞職 7
無系統虎列刺 37
人間レコード 45
髪切虫 56
継子 62
人間腸詰 74
悪魔祈禱書 93
少女地獄 105
名娼満月 203
女坑主 220
戦場 233
冥土行進曲 257

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

芝居狂冒険 281
オンチ 290
名君忠之 311
赤猪口兵衛 327
解題（中島河太郎） 365
解説対談（埴谷雄高・谷川健一） 371

夢野久作全集6

# 巡査辞職

## 前篇

「草川の旦那さん。大変です。起きて下さい。モシモシ。起きて下さい。私は深良一知です」

暑い暑い七月の末の或る早朝であった。山奥の谷郷村駐在所の、国道に面したホコリだらけの硝子戸をケタタマシク揺さぶりながら、一人の青年が叫んだ。

それは見るからにここいらの貧乏百姓の児と感じの違った、インテリじみた色の白い、鼻筋のスッキリとした美しい青年であった。青々と乱れた頭髪が、白い額の汗に粘り付いていたが、神経の激動のために、その濃い眉がピクピクと波打って、赤い小さな理知的な唇がワナワナとわなないながらも、その睫毛の長い黒い瞳は、言い知れぬ恐怖のためであろう、半面を蔽うた髪毛の蔭から白いホコリの溜った硝子戸の割れ目を凝視したまま、奇妙にヒッソリと澄んでいた。慌てて走って来たものと見えて、手拭浴衣の寝巻に帯も締めない素跣足が、灰色の土埃にまみれている。

……と……駐在所の入口になっている硝子戸が内側からガタガタと開いて、色の黒い、人相の悪い顔に無精鬚を蓬蓬と生やした、越中褌一つの逞しい小男が半身を現わした。

「どうしたんか」

「アッ、草川の旦那さん」

草川巡査は睡そうな眼をコスリコスリ青年の顔を見直した。

「何だ。一知じゃないかお前は……」

「はい。あの……あの……両親が殺されておりますので……」

「何……殺されている？　お前の両親が……」

「はい。今朝、眼が醒めましたら、台所の入口と私の枕元に在る奥の間の中仕切が開け放しになっておりましたから、ビックリして奥の間の様子を見に行ってみますと、お父さんとお母さんが殺されております。蚊帳が釣って在りますので、よくわかりませんが、枕元の畳と床の間のあいだが一面、血の海になっております」

「いつ頃殺されたんか。今朝か……」

「わかりません。昨夜……多分……殺された……らしゅう

御座います」
「泣くな……。たしかに死んでいるのだな」
「……ハイ……ハイ。今しがた、神林医師を起して、見に行って貰いましたが……まだ行き着いて御座らぬでしょう」
「うむ。ちょっと待て……顔を洗って来るから」
草川巡査は、裸体のまま直ぐに裏口へ出て、冷たい筧の水で顔を洗った。それから大急ぎで蚊帳と寝床を丸めて押入に投込んで、机の上に散らばっていた高等文官試験準備用の参考書や問題集を二、三冊、手早く重ねて片付けると今一度、駐在所の表口へ顔を出した。
「一知……」
「ハイ」
「こっちへ入れ。足は洗わんでもええから……」
二人は駐在所の板の間に突立ったまま向い合った。草川巡査の小さな茶色の瞳は、モウ神経質にギロギロと輝き出していた。
「何時頃殺されたんか。わかっとるか」
一知は潤んだ大きな眼をパチパチさせた。
「……わかりません。昨夜十二時頃寝ましたが、今朝起きてみますと、モウ殺されておりましたので……蚊帳越しですからよくわかりませんが、二人とも寝床の中からノタクリ出して、頭が血だらけになっております……」
「それを見ると直ぐに走って来たのだな」
「ハ……ハイ……」
暗い駐在所の板の間に立った一知は涙ながらも恐ろしそうに身震いした。そうして突然に大きな嚏を一つしたが、それは汗が乾きかけたせいであったろう。
草川巡査は無言のまま点頭いた。傍の警察専用の電話に取付いて烈しくベルを廻転させると、静かな落ち着いた声で、五里ばかり離れている×市の本署へ、聞いた通りの事実を報告した。……と……向うから何か言っているらしい……。
「……ハ……ハイ。まだ、それ以上の事実はわかりませんので……ハイ。報告して参りました者は深良一知と申しまして村の模範青年です……ハイ。被害者の養子です。ハイ、元来この村の区長の次男であったのですが、今年の二月に深良家……被害者の処へ養子に行った者です。まだ籍は入れていないようですが。ナア一知……お前はまだ籍を入れておらんじゃろ……ウン……そうじゃろ。ハイハイ……何ですか……ハイハイ……その深良家と申しますのは村からチョット離れた小高い丘の上に在ります一軒家で、村の者は皆、深良屋敷深良屋敷と言っております。村でも一番の大地主で、この辺でも指折の富豪です。殺されたと言うのは、その老夫婦ですが……イヤイヤこの頃この国道にはソンナ浮浪人は通らないようです。以前はよくルンペンらしい者の姿を見かけましたが。ハ……ハイ、承知しました。私はこれから直ぐに現場へ参ります。ハ……お待ちしてお

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ります」

草川巡査は手早く帽子を冠って、官服のズボンに両脚を突込んで、上衣を引っかけた。編上靴をシッカリ搦み付けて、勝手口から佩剣を釣り釣り出て来ると、国道とは正反対の裏山に通ずる小径伝いにサッサと行きかけたので、表通りで待っていた一知青年は、慌てて追っかけて来た。

「アッ。こんな方へ行くのですか。山道はまだ濡れておりますよ。草川さん……」

草川巡査も何やらハッとしたらしく、そう言う一知の何かしら狼狽した、オドオドした眼付きを振返ると、ちょっと立止まって、その顔を穴のあく程凝視したので、一知は見る見る真青になって、唇をワナワナと震わした。しかしその時にフット気を変えた草川巡査は、

「ウン。人目に付くと五月蠅からね」

と何気なく言い棄てて、露っぽい小径の笹の間を蹴分け蹴分け急いで行った。

元来この谷郷村は、こうした山奥に在りがちな、一村挙って一家と言ったような、極めて平和な村だったので、高文の試験準備をしている草川巡査は最初、大喜びで赴任したものであったが、そのうちに彼の竹を割ったような性格がだんだんと理解されて来るにつれて、村の者から無上の信用と尊敬を受けるようになった。それに連れて村の納税や衛生の成績がグングン良くなるばかりでなく、以前は山向うの隣県へ逃込もうとして、よくこの村を通過していた前科者などが、今では草川巡査の眼が光っているためにチットモ通らなくなった……と言う噂まで立つようになっていた。そこへ起った今度の事件なので、草川巡査は最初からチョット一つタタキノメされたような感じで、一種異様な興奮……緊張味を感じているのであった。

しかし草川巡査を興奮させ緊張させた原因は、たんにそれだけではなかった。モットモット大きい、恐ろしく深刻な事件の予感が、美青年、深良一知の声を聞いた一刹那から黒い嵐雲のように草川巡査の全神経に圧しかかって来たのであった。

深良屋敷の老夫婦が、非業な死に方をするに違いないと言う事は、ズッと以前から村中の人々が一人残らず心の片隅で予感していた処であった。……今に見ろ。ロクな死に方をしないから……と言って深良屋敷を呪詛わない村の人間は恐らく今までに一人もいなかったであろうと思われるくらい、深良屋敷は村中の怨恨の焦点になっていたもので、その意味から言うと、この村の人々は一人残らず今度の事件の嫌疑者か共犯者と考えてもいい……と言ったような極端に神秘的な因縁が、今度の事件に絡まっているのであった。それがこうして突然に実現されたのだから、万一村の人々にこの事が知れ渡ったら、皆、今更のようにハッと顔を見合わせて、お互い同士を疑い合うであろう。それと同時に草川巡査にとっては、想像も及ばない探査の困難な殺

人事件……村民全部が嫌疑者……と言ったような極度の神秘的な深みを持った迷宮事件を押付けられたようなもので、ちょうど横綱と顔を合わせた褌担ぎみたような自分の力の微弱さを、今更のように思い知らずにはいられないのであった。

……これが俺の失敗のタネになりはしないか……永い間の高文の試験準備で疲れ切っている俺のアタマは、こうした現実の出来事に向かないくらい弱々しく、過敏になっているのではないか……

……とにも角にも、どこまでも慎重に……慎重に取りかからねばならぬ……あくまでヘマを遣ってはならぬ……

と言ったような、武者振いがまだ具体的に現われて来ない前のような神秘的な戦慄に、草川巡査は襲われてしようがないのであった。そうしてそのドキドキした予感を中心にして、深良屋敷の惨劇を裏書きしているらしい色々な過去の前兆が、眩しいくらい明るい、またジメジメと薄暗い木立の中を押分けて行く草川巡査の、勉強に疲れた記憶力の中に、今更のようにマザマザと浮かみ上って来るのであった。

深良屋敷と言うのは村外れの国道から二、三町北へ曲り込んだ、小高い丘の上の雑木林に囲まれた小さな一軒家であった。もっともズッと以前の明治三十年頃までは、深良家の先祖代々が住んでいた巨大な母家が、雑木林の下の段の平地に残っていたが、それが現在の牛九郎爺さんの代になると、極端な労働嫌いの算盤信心で、経費が掛ると言って、その一段上の雑木の中に在るタッタ三室しかない現在の離家に移り住むようになった。同時に牛九郎爺さんは、その巨大な母家をアトカタもなく取片付けて隣村の大工に売払い、数多い雇人をタタキ放し同様にして追出してしまい、有る限りの田畑をソレゾレ有利な条件で小作に付け、納まりの悪い小作人の所有の田畑は容赦なく法律にかけて、自分の名前に書換えて行った。それに又、配偶のオナリと言う女が亭主に負けない口達者のガッチリ者で、村の女房達が第一の楽しみにしている御大師様や妙法様の信心ごとの交際なぞには決して出て来ないのみならず、臍繰金を高利に廻して、養蚕や米の収穫後になると透かさずに自分で出かけて、ピシピシと取立てたりするようになったので、深良屋敷の老夫婦に対する村中の気受がイヤでも悪くなって来るばかりであった。

「今に見ておれ。あの夫婦は碌な死にようはせぬから……信心をせぬような犬畜生にはキッと天道様の罰が当る」

とか何とか蔭口を言う者が方々に出て来るようになったが、勿論それ位の事に驚くような牛九郎夫婦ではなかった。殊に住んでいる場所が場所だけに、村の人々の気持ちと全然かけ離れた別人種扱いにされながらも、平気で我利我利亡者に甘んじて、極めてヒッソリと暮しているのであった。

しかし、それでも、その丘の上一帯の森の木立は、さす

がに昔の大きな深良屋敷の構えの面影を止めていた。夜になるとさながらに巨大な城砦が、神秘的な島影のように真黒々と星空に浮出して、昔ながらに貧弱な村の風景を威厳していたので、小さな住居に不似合な深良屋敷の名称も、自然、昔のまんまに残っているのであった。

その深良屋敷の老夫婦の間にはマユミという娘がタッタ一人あった。しかも、それが非常な美人だったので「深良小町」の名が近郷近在に鳴り響いているのであったが、可哀相な事にそのマユミは、学問上に早発性痴呆と言う半分生まれ付みたような薄白痴であった。大まかな百姓仕事や、飯爨や、副食物の世話ぐらいは、どうにかこうにか人間並に出来たが、その外の読み書き算盤はもとより、縫針なんか一つも出来なかった。妙齢になっても畑の仕事の隙さえあれば、蝶々を追っかけたり、草花を摘んだりしてニコニコしている有様なので、世話の焼ける事、一通りでなかったが、それを母親のオナリ婆さんが、眼の中に入れても痛くない位可愛がって、振袖を着せたり、涙汁を擤んで遣ったりしているのであった。

しかし何を言うにも、そんな状態なので、誰一人壻に来る者がないのには両親とも弱り切っていた。のみならず所謂、白痴美と言うのであろう。その底なしの無邪気な、神神しいほどの美しさが、誰の目にもたまらない魅力を感じさせたので、さもなくとも悪戯好きの村の若い者は皆申し合わせたように「マユミ狩」と称して、夜となく昼となく深良屋敷の周囲をウロ付いたものであった。マユミの白痴をいい事にして入れ代り立代り、間がな隙がな引っぱり出しに来るので、そのために両親の老夫婦は又、夜の眠も寝ない位に苦労をして追払わなければならなかった。

しかしその中にタッタ一人、このマユミにチョッカイを出しに来ない青年がいた。それはこの谷郷村の区長、乙束仙六という五十男の次男坊であった。村では珍しく中学校まで卒業した、一知という男で、村の青年は皆、学者学者と綽名を呼んで別扱いにしている、今年二十三の変り者であった。

ちょうどその頃、一知の父親の乙束仙六は、養蚕の失敗に引続く信用組合の公金拐帯の尻を引受けて四苦八苦の状態に陥り、東京で近衛の中尉を勤めている長男の仙七の血の出るような貯金までも使い込んでいる有様で、心労の結果ヒドイ腎臓病と神経衰弱に陥って寝てばかりいる状態は、他所の見る目も気の毒な位であったが、しかし次男坊の一知は、そんな事を夢にも気付かないらしく、自分勝手の呑気な道楽仕事にばかり熱中していた。

その道楽仕事と言うのは、中学時代から凝っていたラジオで、幾個もいくつも受信機を作っては毀し毀しするので、彼の勉強部屋になっている区長の家の納屋の二階は、誰にもわからない機械器具の類で一パイになっていた。村の人人は、

「聴かぬためのラジオなら、作らん方が好え。学者馬鹿た

あ、よう言うたる」

と嘲笑し、両親も持て余して、好きにさせていると言う、一種の変り者で、言わばこの村の名物みたようになっていたのが、この一知青年であった。

だからその一知が、牛九郎老夫婦の眼に止まって壻養子に所望されると、両親の乙束区長夫婦は一議にも及ばず承知した。一知もラジオ弄りさえ許して貰えれば……と言う条件付で承知したもので、その纏まり方の電光石火式スピードと言うものは、万事に手緩い村の人々をアッと言わせたものであったが、それから又間もなく一知は、この村の習慣になっている物々しい壻入りの儀式が恥かしかったものか、それともその式の当夜の乱暴な水祝を忌避がったものか、双方の両親が大騒ぎをして準備を整えている二月の末の或る夜の事、自分の着物や、書物や、いろいろな機械屑なんぞを、こっそりとリヤカーに積んで、深良屋敷へ運び込み、そのまま何と言われても出て行かないで頑張り通し、双方の両親たちを面喰わせ村中を又もアッと言わせたものであった。

そうしてそれから後、小高い深良屋敷を囲む木立の間から、眩しい窓明りと共に、朗らかなラジオの金属音が、国道沿いの村の方へ流れ落ち始めたのであった。

「イッチのラジオが、やっとスイッチを入れたバイ」

と青年達は甘酸っぱい顔をして笑った。

しかし谷郷村の人々の驚きは、まだまだそれ位の事では足りなかった。

深良屋敷の若い夫婦は、新婚匆々から、猛烈な勢いで働き出したのであった。今まで肥柄杓一つ持った事のない一知が、女のように首の付根まで手拭で包んで、手甲脚絆の甲斐甲斐しい姿で、下手糞ながら一所懸命に牛の尻を追い、鍬を振廻して行く後から、薄白痴のマユミが一心不乱に土の上を這いまわって行くのを、村の人々は一つの大きな驚異として見ない訳に行かなかった。

一知は間もなく両親に無断で、小作人と直接談判をして、麦を蒔いた畠を一町歩近くも引上げて、ドシドシ肥料を遣り始めた。村の人々はその無鉄砲に驚いていたが、その丹精が一知夫婦だけで立派に届いて見事に実った麦が丘の下一面に黄色くなって来ると、最後まで冷笑していた牛九郎老夫婦もさすがに吃驚したらしい。養子夫婦の親孝行のことを今更のように村中に吹聴してまわり始めた。一知の掌が僅かの間に石のように固くなっている事や、娘のマユミが一知と二人ならば疲れる事を知らずに働く事なぞを繰返し繰返し喋舌って廻るので、村の人々は相当に悩まされた。

処が不思議な事に、そんな序に話がラジオの事に移ると、何故かわからないが牛九郎夫婦は、あまり嬉しくない顔色を見せた。殊にそのラジオ嫌いの程度はオナリ婆さんの方が非道いらしかった。

「まあ結構じゃ御座んせんか。毎晩毎晩何十円もする器械で面白いラジオを聞いて……」

なぞと挨拶にでも言う者がいるとオナリ婆さんは、きまり切って乱杭歯を剝出してイヤな笑い方をした。片足を敷居の外に出しながら、すこし勢込んで振返った。

「ヘヘヘ。あれがアンタ、玉に疵ですたい。承知で貰うた婿じゃけに、今更、苦情は言われんけんど、タッタ三室しかない家の中が、ガンガン言うて八釜しゅうてなあ……それにあのラジオの鳴りよる間が、養子殿の極楽でなあ。夫婦で台所で固まり合うて、何をして御座るやら解らんでナ。ヘヘヘヘ……」

あとを見送った人々は取々に言った。

「何なりと難癖を付けずにゃおられんのが、あの婆さんの癖と見えるなあ。ハハハ」

それから後、そのオナリ婆さんが一知の畠仕事に付いてまわって、色々と指図をしているのを見て、

「ソレ見い。何のかんのと言うても一知の働き振りはあの婆さんの気に入っとるに違いないわい。そこで欲の上にも欲の出た婆さんが、出しゃばって来て、あの上にも一知を怠けさせまいと思うて要らぬ指図をしよるに違いない。あれじゃ若夫婦もたまらんわい」

と言ったり、それから後、深良屋敷のラジオがピッタリと止んで、日が暮れると間もなく真闇になって寝静まるのを見た人々が、

「あれは一知がラジオの器械を毀したのじゃないらしい。婆さんが費用を咎しんで止めさせたものに違いない。一知さんも可哀そうにのう。タッタ一つの楽しみを取上げられて」

と同情した位の事であった。

然るにその一知夫婦の苦心の麦の収穫が、深良屋敷の算盤に乗った頃から、まだ一カ月と経たぬ今朝になって、その牛九郎夫婦が殺されている……と言うのは、普通の場合の意外と言う以上の意外な意味が籠っているように思われるのであった。だから、これは非常に簡単明瞭な、偶発的な事件か、もしくは一筋縄で行かない深刻、微妙な事件に相違ない……と言ったような予感が、今朝、最初に一知の美しい顔を見た瞬間から、ヒシヒシと草川巡査の疲れた神経に迫って来たのであった。ありふれた強盗、強姦、殺人事件にばかりぶつかって最初から犯人のアタリを付けてかかる流儀に慣れ切っている草川巡査は、この事件に限って、実際、暗黒の中を手探りで行くような気迷いを感じながら、駐在所を出たものであった。

ところが、それから間もなく草川巡査が、山の中の近道へ廻り込んだ時に、深良一知青年が、背後から叫んだ声を聞くと、そのトタンに草川巡査の心気が一転したのであった。勉強疲れで過敏になっている草川巡査の神経の末梢に、一知青年の叫び声は、あまりに手強く、異様に響いたのであった。それは無論、深良一知が偶然に発した叫び声で、

別段に深い意味も何もない驚きの声に相違ないのであったが、これが所謂、第六感というものであったろうか。何故と言う事なしに、

「犯人はドウヤラこの一知らしい」

という直感が、草川巡査の脳髄のドン底にピインと来たのであった。それも、やはり何の理由も根拠もない、ただそんな風に感じただけの感じであったが、それでもそうした無意識の叫びの中に、一知の心理の奥底に横たわっている普通とは違った或る種の狼狽と恐怖心とが、偶然にも一パイに露出しているのを、病的に過敏になってる草川巡査の神経の末梢がピッタリと捕えたのであろう。一知を従えて山の中を分けて行く僅かの間に「コイツが犯人に相違ない」と言う確信が、草川巡査の脳髄の中へグングンと高潮して来るのを、どうする事も出来なくなった。それに連れて草川巡査の意識の中には、

——何と言う図々しい奴だろう——

——絶体絶命の動かぬ証拠を押える迄は、俺は飽く迄も知らん顔をしてくれよう——

と言ったような極度に意地の悪い考えと、

——コンナ柔和な、美しい、親孝行で評判の模範青年に疑いをかけたりするのは、俺のアタマがどうかなっているせいじゃないかしらん——

——万一、実際の証拠が揚がらないとすれば、コンナにも美しい、若い夫婦の幸福を出来る限り保護して遣るのが、人間としての常識ではないか——

と言ったような全然、相反する二つの考えが、草川巡査の神経の端々を組んず、ほぐれつ、転がりまわり始めたのであった。

太陽はまだ地平線を出たばかりなのに、草川巡査と一知が分けて行く森の中には蟬の声が大浪を打っていた。その森を越えた二人は無言のまま、直ぐ鼻の先の小高い赤土山の上にコンモリと繁った深良屋敷の杉の樹と、梅と、枇杷と橙と、梨の木立に囲まれている白い土蔵の裏手に来た。草川巡査はあとからあとから湧き起って、焦げ付くように消えて行く蟬の声のタダ中に、昨夜の儘の暗黒を閉め切って在るらしい奥座敷の雨戸をグルリとまわった時に、言い知れぬ物凄い静けさを感じたように思ったが、やがて半分開いたままの勝手口まで来ると、その暗い台所の中で何かしていた美しい嫁のマユミが、頭に冠っていた白い手拭を取って、ニコニコしながら顔を出した。

「あら……お出でなされませ」

と丁寧にお辞儀をしたが、その笑顔を見ると、まだ両親が殺されていることを少しも知らないでいるらしい、極めて無邪気な、人形のような美しい微笑を浮かべていたので、こんな事に慣れ切っていた草川巡査が、何故ともなく慄然とさせられた。

「マユミさんはまだ何も知らんのかね」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com